

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日 運輸省特設郵便局特許第六二七号
明治三十一年十月十日第三種郵便物認可 毎冊一圓二日發行
平成十八年九月一日發行 二冊百九卷第九号

ホトトギス

九月号



俳句随想 〔二百九十一〕

汀子

「汀子特選に選ばれた自分の俳句をある人が下五字を少し変えてその人の句にしてホトトギス雑詠に投句している」という訴えの手紙を頂いた。初めは何のことか理解に苦しんだが、いろいろ問い合わせてみるとその人は盗作を平気でする人だと多くの人から言われているらしい。考えられない俳句の作り方である。その様な方法でしか佳句が出来ない人は何と気の毒な人であろうかと私は思う。

初めて俳句を作るとき、先ず真似事から入るか、又は自分の考えを自分の言葉で十七文字に纏めるか二通りの作り方がある。芸術は真似事から入るとも言われている。しかし例え最初がそうであつてもやがて自分の言葉、自分の感性で作るようにならなければならない。

初めから真似をしないで来た人は初めは稚拙であつてもそのまま順調に佳句に到達できるであろう。真似事から入った人は自分の俳句への脱皮がまぬがれがたく苦しい試練となる。それを乗り越えなければ作家にはなれない。真似した句は自分の句ではないのである。自分がどのような俳句の作り方をしているか。一度振り返ることも大事である。必ずスランプという壁が待ちうけている。その時が佳い作家になれるかなれないかが試されるチャンスである。

旬日記 汀子

平成十七年九月一日 苜屋ホトギス会

影のあるところに生れ秋の風
水音の中に確かに鉦叩

九月四日 関西野分会

虫聞きて四半世紀はまたたく間
忙しさの中に子規忌のありにけり
子規忌てふ命の讃歌あることを
虫の囀近づけて旅心かな

九月四日 下萌旬会

野の色の一色ならず藤袴
轡虫聞き分けて高原にあり
高原の野の露乾きゆける音
高原の季節移ろふ藤袴
仲秋の災害多きことも又

九月五日 ロイヤル俳壇

三日月のしばし隠るるまま沈む
室町の世を今に継ぐ宗祇の忌
秋の夜の風雨つゝのりて行くことも
これよりは台風に処す心あり
誰れに見てほしきものまてばしひ
台風の行方に待むほかはなく

九月八日 清交社

芒穂を解き初めしとて活けらるる
染筆や夜長の墨を磨ることに
何か終へなにかはじまる夜の長し
星のこと語りて尽きぬ夜の長し
旅の荷にあれもこれもと足す夜長
仕事とは減ることのなく夜の長し
九月九日 工業倶楽部
水音と胡弓のしらべ風の盆

決めかねてゐる旅一つ秋の夜
消息の届かぬままや葉月来る
九月十一日 日本伝統俳句協会全国俳句大会
さまざまに伝えて秋麗の灯を囲む

九月十一日 大阪倶楽部

萩叢に触れてゆく風ふむ風
蠅螂のひそみぬし野と気づきけり
松島の夜々の月いまだのあたり
旅終へて家居に仰ぐ十日月
なほ満ちてゆく夜々の月旅帰り

九月十三日 綿業倶楽部

鈴虫の鳴ける我が家に旅帰り
秋潮をめぐる小舟ふと秋の潮
松島の渡り来る風ふと匂ふ
みちのくのそれも松島秋の潮
読み進む書信蹟く冷やかに
九月十五日 悼 井土祥風様
露けしや虚子と遊びし思ひ出も

九月十六日 時雨会

わが庭の一隅にして竹の春
松島の満ちゆく月の夜々思ふ
結果よきこと露の世のことながら
待宵の明日は晴れるといふ夜空
九月十七日 子規忌旬会と講演の会

待宵の月見はかなへられさうに
鶏頭の色は問はずに手向け来し
満ちゆるる子規忌の月と仰ぐべく

九月十八日 ホトギス社吟行会

近くとも都会の迷路露けしや
つゞく晴今宵十五夜なりしこと
待宵の月に重ねし旅寝かな
ふたたびは帰れぬ迷路草の露
九月十九日 野分会
虫の音に滞在長くなりしこと

稿債を持ちたる旅の露けしや
子規忌とは若さを惜みつつ学ぶ
九月二十日 有恒俳句会
十六夜の月ならずくと雲まとふ

敬老の日ならずも日々心もて
今宵はも立待月と思ふのみ
汝が頬を叩くは難し秋の蚊よ
逃げる気のない秋の蚊でありしかな
九月二十日 無名会
露ふふむ庭芝踏みて人迎ふ
前身を問うてはうすばかげるふよ
これよりは夜々欠けゆける良夜かな
丹波路の一人欠けたる月の友
紛れんとうすばかげるふ羽たむ
今少し時間の欲しき露の身よ
露乾きゆける早さに朝かな

九月二十一日 夏潮旬会

これ以上予定組まれぬ冷やかに
秋冷の窓の風さへなつかしく
芒活けられしより皆席に着く
九月二十二日 きさらぎ会
高原のますほの芒より展け
風占めて遊びははじめし芒原
旅重ね夜長の稿を携へて
降り出してつものことなく秋の雨
穂を解くや芒は風のものとなる
全体を見る一本の芒より

九月二十日 摩耶山俳句大会

爽やかといふほかはなし山の朝
末枯といふべきかこの華やぎを
摩耶山の晴天に置く露菴
正誤(七月号)

平成十七年七月三日 下萌旬会

この空のどこかに虹の立つべかり

廣太郎句帳

廣太郎

平成十七年九月二日 夢三忌全国俳句大会

その中の松虫草といふ可憐
大花野とは何か這ひ何か翔び
木洩日といふ彩りも大花野

九月三日 芦屋ホトギス会

鉦叩忌日の庭を淋しめず
鉦叩都心にもある住宅地

九月三日 登高会虚子記念文学館吟行会

新涼を広げ桂の葉を広げ
芦屋川残る暑さを吸ひ込めり
水途切れたるより芦屋川残暑
受付は幼馴染や灯下親し
その中に羽音鎮めて萩の館

九月三日 虚子記念文学館投句

五年てふ館の落着秋灯下

九月四日 野分会晋屋例会

仰臥漫録の囁き癩祭忌
虫といふ芦屋の雅ありにけり
虫の宿めきて生家でありにけり

九月五日 蕙心会

新涼の嵐伴ひ来りけり
台風を指呼に大川濁りたる
秋出水東京都心戦けり

爽やかに嵐の中を集ひけり
七草のいくつ下町風情かな
学生の嵩に電車の混む残暑

露の世といふ水禍あり風禍あり
そこはほれ私でんがな蚯蚓鳴く

九月七日 一水会

夜なべして原稿一つ書き上がる

九月八日 土筆会

一本の畦花蕎麦の遅速かな
癩祭忌昨日阪神勝ちました

昨夜星の一つ輝き癩祭忌

癩祭忌仰臥漫録彩溢れ

九月九日 大森康生種情句

昭和の世露けく語られしことも

九月十一日 伝統俳句協会全国大会

秋潮を凹ませてある汽笛かな

九月十二日 朝日カルチャー若草句会

目黒区に住み古り秋刀魚焼きにけり

撫子や日本の未来どこへ行く

明らかに秋刀魚と判る煙かな

九月十七日 ホトギス社句会

月の友今宵は子規も虚子もみて

マルゴーは八二年月の宴
甲子園球場怒濤秋団扇

大都市の氏神として昼の虫
品川といふ坂多き街残暑

神鈴といふ新涼の音色かな
山の手と下町隔て竹の春

秋の蚊に惚れ込まれたる脚線美

九月二十日 草木瓜会

彼岸花子規の心に触れもして

爽やかな果実の里として稲城
爽やかに鉄路二本を抜けて句座

忌日とは巡りくるもの曼珠沙華

爽やかに都市と自然を繋ぐ河

九月二十七日 若水会

この風にあの星空に白露かな

夜食にと残しておいた筈なのに

神々の国は白露の静けさに

一本は夜食の為のワインかな

密といふ千草の花の主張かな

ママの味おふくろの味夜食かな

九月二十八日 日黒学園句会

露の袖忌日の寺を淋しめず

大花野来て紫の風となる

その中の一輪が続べ大花野
大花野一步に帰心失へり

雑詠

廣太郎 選

病み抜けし身に人の情花の情 名古屋 岩松草泊
 花冷や病み抜けし身は庇はねば 同 同
 病み抜けし命しづかに花の下 同 同
 面積となりて爆布となりて落つ 同 同
 雨は降ることを爆布は落つことを 同 同
 一爆となり万緑を駆け下りる 同 同
 五分咲きといふ城跡のよき梅に 福岡 松尾緑富
 観梅のまこと静かな歩を運び 同 同
 心よき梅見疲れを覚えたる 同 同
 みよし野の花と眠りし三時間 長岡 安原 葉
 深々と花に包まれ眠る宿 同 同
 寝足りしや一夜吉野の花の宿 同 同
 花の色ならざるはなき雨しづく 神戸 山田弘子
 鳥獣は眠り桜は星のもの 同 同
 灯を消して花の奈落となる旅寝 同 同
 香草を堆く盛り初鯉 榎原 稲岡 長
 黒潮を抜けしばかりの初鯉 同 同
 マロニエの花を咲かさむ計りごと 同 同

日高路は仔馬天国風光る 留萌 三好雷風
 日高とは馬の国なる旅五月 同 同
 牛鳴いて雄鳩鳴いて牧五月 同 同
 バーナードリーチを語り春の宵 たつの 浅井青陽子
 リーチ展一巡りして春惜む 同 同
 無心とは至純のこゝろ館の春 同 同
 北海の海鳴り棲める古巢かな 神戸 長山あや
 燭いくつ上げてみほとけなほ臚 同 同
 虚子百句語り来し日々あたたかし 同 同
 夕べ早や人と別れて暮かぬる 香川 湯川 雅
 光る為風入れ替へてある若葉 同 同
 酌むも亦花を愛する姿かな 同 同
 菜の花や電車に乗れば旅人に 熱海 嶋田一步
 伊豆急は海に沿ひゆき山桜 同 同
 胡蝶蘭伊豆七島の二島見え 同 同
 摘みごろの蓬と見るも吾は旅人 同 嶋田摩耶子
 つひぞ雪無かりし庭の雪柳 同 同
 花吹雪止みてひつそりせしそこら 同 同
 落花踏み夕日見送りをりにけり 大阪 塙 告冬
 旅暮れて蛙の声の中にある 同 同
 青空のこぼるるを受け罌粟の花 同 同
 草笛も小諸も虚子もみな遠く 東村山 村松紅花
 半世紀前この花に別れしよ 同 同
 懐旧の落花浴びたるのみの旅 同 同

雑詠句評（八月号より）

一步・小木菟・基子
仁義・弘子・雅也
昭代・比奈夫・純也
暮潮・廣太郎

一分二十三滴輸血寒昴 小樽 後藤 一秋

一分間に二十三滴の輸血とは大変ゆっくりとした輸血で手術と大量出血の際の輸血とは違い貧血にして栄養補給のためと思われる。即ち長い時間をかけての輸血で夜となった病床の窓には寒星がきらめき一か所に続べ集まるといふ昴星団があつた。病状末期とも思われる病床にあつて作者の心は澄みに澄んでいると思うのである。その寒も過ぎそして、二〇〇六年四月九日、午後八時三分。私の最も親しい俳友の一人であつた一秋君は昴ある夜を天国へ去つていった。

俳句特有のドライな叙法にして、しみじみとした深く大きな余韻のある一句である。（一步）

一分間に二十三滴の輸血というのは果たしてどのくらいの早さなのかは筆者には判らないが、作者は平成十八年四月九日惜しまれつつ幽明界を異にされた。闘病生活を送られている時の心情がしみじみと伝わってくる句である。一人病室で輸血を受けている作者の仰ぐ「寒昴」の光が何とも寒々と見える。（廣太郎）

波荒き瀬鳴りに雛のさらはるる 姫路 桑田青虎

一読雛流しの状景であることがわかる。岸辺のややゆるやかな水に置かれた雛は急流に届くやあつという間に瀬波に攫われてしまった。雛流し自体一抹のあわれさのある行事だが、あつという間に見えなくなつてしまった雛にひとしおのあわれさを感じておられるのである。「瀬鳴り」とか「さらはるる」とかという措辞に、作者の行き届いた配慮をうかがうことが出来る。（小木菟）

現代の雛祭は、家に雛人形を飾つて祝う形式が多いが、元々は人形を水に流す風習からきているというのが本来のものであるが、この句もその流し雛の情景である。一年間の邪気を流す、という意味での景が繰り広げられている。高波に「さらはるる」雛は哀れではあるが、伝統的な習慣が正しく伝えられている。

（廣太郎）

天地有情

心子選

戦とは桜とはとて語るなり 静岡 鷺巢ふじ子
 むらさきの視線の先の董かな 同
 みよし野はもう訪へぬ距離花は葉に 東大阪 東野太美子
 その先は考へぬこと花を愛づ 同
 プランター咲かせ弥生の駐在所 小金井 武井良平
 昨夜の雨花の余力はおとろへず 同
 全山の桜の景が濡れてゐる 東京 今井千鶴子
 みよし野の雨の洗ひし春の星 同
 明日の晴約す吉野の花に星 長岡 安原 葉
 出国を明日に吉野の花にあり 同
 風騒の血のありやなし粽食ぶ 樺原 稲岡 長
 屈原の憂愁知らず粽食ぶ 同
 春煖炉ドイツ風窓口シア風 東京 稲畑廣太郎
 春煖炉老柳山荘開け放ち 同
 一瞬の晴一瞬の名残雪 金沢 藤浦昭代
 戻り雪とて一夜さに埋る村 同
 大由布のほととぎすとは雲の中 東京 坊城俊樹
 虚子の世の城下鱈食らふなり 同

古城址の歴史を偲びつゝ梅見 福岡 松尾緑富
 梅匂ひ来るベンチあり腰下ろす 同
 探梅や子らの離れし家ばかり 徳島 上崎暮潮
 身を支へくるるこの足梅探る 同
 花明り星より霽れてゆく吉野 宝塚 水田むつみ
 今生の花慈しむ父母と坐し 同
 花の怪を象の小川へ流しけり 神戸 長山あや
 祝意もて謝意もて集ふ春の宵 同
 雨つむぎ言の葉つむぎゆく落花 同 山田弘子
 みな胸に落花を溜めて別れなむ 同
 花の一途は咲くときも散るときも 熊本 岩岡中正
 身ほとりにして花のこゑ風のこゑ 同
 いぢらしと思ふも愛や犬ふぐり 熱海 嶋田摩耶子
 葉桜になりおほせたる下を掃く 同
 温室を出れば風来る蝶の来る 同 嶋田一步
 憩ふ人また入れ替り藤の花 同
 青葉うめつくして雨の静けさに 姫路 桑田青虎
 黄桜の変化宇宙の一変化 同

天地有情句評

汀子

全山の桜の景が濡れてゐる 東京 今井千鶴子

雨が上ったばかりの桜の輝きが新鮮に作者の心を捉えた。

明日の晴約す吉野の花に星 長岡 安原 葉

明日の天気を星に予測した吉野山の花。

風騒の血のありやなし粽食ぶ 樞原 稲岡 長

国風と離騒を踏まえた風流の心と屈原の粽との配合の妙。

春暖炉ドイツ風窓ロシア風 東京 稲畑廣太郎

春暖炉が焚かれているヨーロッパ風な山廬に楽しむ時間。

戻り雪とて一夜さに埋る村 金沢 藤浦昭代

雪の警戒を解いてからの雪にたじろぐ作者。

戦とは桜とはとて語るなり 静岡 鷲巢ふじ子

華やかに咲いていさぎよく散る桜、もののふの心も又。

みよし野はもう訪へぬ距離花は葉に 東大阪 東野太美子

花が終った吉野山を遠い距離とする作者の心。

昨夜の雨花の余力はおとろへず 小金井 武井良平

雨にも散らない桜の勢いが描けた。